※本文の複製、転載、改変、再配布を禁止します。

巻頭言

最近考えていることと当社の知的財産経営について

池　田　　仁*

資源を持たない日本が今後とも国際社会の中で競争力を維持していくためにはどういう考え方で臨めばよいかという観点から，このたび経済産業省が「新経済成長戦略」をまとめた。国際的取り組みと国内的取り組みが提言されているが，国際的取り組みでは日本を「世界のイノベーションセンター」と位置付け，これまで競争力を支えてきた高度なモノ造り産業をさらに強化するとともに，先端技術の開発，実用化による新産業を育成することで世界に貢献していこうという考え方である。現在，世界第２位の経済大国である日本も何年後かには規模の点で中国，インドに抜かれると予想されるが，質の点をあわせて存在感を示そうというものだ。

われわれ世代は幸いに戦後の経済成長の中で生き，社会人としても様々な技術革新に直接取り組むことができた。21世紀を迎え，将来が今までの延長線にはなく，変化点に近づいていることが様々な事実から感じられるが，今現在何をやっておかねばならないか真剣に考えておきたい。

知的財産にもこれまでの日本の姿勢があらわれていると聞く。明治の文明開化から戦後に至るまでの間，「追いつけ，追い越せ」の精神で西欧の文化，技術をがむしゃらに吸収し，その応用技術の開発に力をいれ，産業を発展させてきた。この歴史が出願傾向にもあらわれ，基本技術が少なく，利用技術，周辺技術が多い，国内出願が多く，国際出願が少ないという実情になっている。これまでは強みでもあったのであろうが，イノベーションセンターを志していくのであるから，この点にも変化が期待される。

当社は電気炉により様々な形鋼を生産する素材部門，乗用車・トラックバス・超大型ダンプのホイール，建機の履帯，橋梁を生産する加工部門，マイカ（人工雲母）などを研究開発・生産する新規事業部門で構成されている。事業戦略，研究開発戦略，知的財産戦略の三位一体の管理，階層別知財教育については，どの部門も共通的に進めている。しかしながら，それぞれの部門の属する業界の違いがあり，お付き合いいただいているお客様も異なるため，部門に応じた考え方で対応していく部分もある。最近では「海外出願の拡大」「ノウハウの秘匿」がそれにあたる。

当社自体の海外への展開度はそれほど高くないこともあり，海外出願はこれまであまり多くなかった。しかしながらお客様が広く海外展開されており，当社としても海外出願をよく考える必要がでてきた。これまでは欧米先進国に出願しておけばよかったが，これからはBRICs諸国，特に中国，イン

* トピー工業株式会社　常務取締役　Hiroshi IKEDA

※本文の複製、転載、改変、再配布を禁止します。

ドをどうするか考える必要がある。海外といえば，模倣品，類似設備の問題もあり，これにも目をくばっていく必要がある。

特許出願することは同業の専門家に示唆を与えることにもなるため，ノウハウで秘匿した方が得策の場合も多い。こういう技術についてはこれまで営業秘密として秘匿することに注意してきたが，一歩進めて先使用権の確保という面で考える必要がある。

先日，国の知的財産推進計画2006について話を聞く機会を得たが，その中でもこれらについて課題として取り上げられている。当社自体でよく考えて答えを出していかなければならないが，国の施策も是非参考にさせていただきたいと考えている。最近の取り組みはこのように考えているが，これからもたえず新しい課題が出てくると思うのでよく勉強して対処し，知的財産経営のレベルを上げていきたい。

この原稿はワールドカップドイツ大会開催中に書いている。多くの方が深夜，早朝SAMURAI BLUEに声援をおくられたと思う。一部の辛口評論家を除き，予選突破の予想であったと思うが，結果は力の差を感じさせるものであった。野球の世界でこの春WBC大会で優勝したこともあり，サッカーでもこの勢いでと期待したが，世界に伍していけるようになるにはまだまだ時間がかかると感じられた。サッカーのレベル差とは当然違うと思うが，「世界のイノベーションセンター」への道も平坦ではないと思う。モノ造りの会社で研究開発に携わるものとして，次の世代，その先の将来に何か残してやらねばならないと考える昨今である。